

〈研究ノート〉

カボチャと韓国語のホバツ

朴 福 美

Japanese “kabocha” and Korean “hobak”

Pak Pogmi

はじめに

カボチャは日ごろ目にし、食べているもの以外にも大きさや形、色もさまざま、テレビなどで見て驚くことがたびたびある。今はスーパーでも売っているズッキーニもカボチャの一種で、80年代にはもっぱら、イタリア料理に使われる食材という印象が強かった。そのころ私は韓国で生活していて、ほとんど韓国人と同じ生活をしていたが、エホバツという、形はきゅうりに似て、生食しない食材を使っていた。カボチャとはあまり似ていない味と形だったが、何しろ日本語に翻訳すると「幼カボチャ」だから、カボチャの種類であることは理解していた。そして使っているうちに、これはズッキーニというものではないかと思うようになった。韓国では大きくて丸いカボチャよりは、ズッキーニのほうがはるかに身近で、しゃれた食材などという印象はまったくなかった。何しろナズナが市場で売っていたりして、「ところ変われば品変わる」というが、野菜ほどそれを実感したことはない。

ズッキーニもそうだが、カボチャ自体がそれほど古い食材ではないという。原産地が中米から南米北部の熱帯地方で、東アジアの多湿地帯から温帯北部に多く栽培される種であり、日本への渡来はカボチャ類の中で日本カボチャが最も古く、16世紀に豊後国にポルトガル船が伝えて、その後各地に栽培が広まったという。

カボチャにはまたトウナス、ボウブラ、ナンキンなどの別名がある。カボチャはカンボジアに生じたものと考えて名づけられ、ボウブラは長崎へカボチャを伝えたとき、ポルトガル語でウリ類をアボブラaboboraというので、それがなまったものといわれている。トウナス（唐茄子）は、果形がナスに似ているため中国から渡来したナスという。

本当にわかりやすく、語源に関しては一般的にこれが定説みたいな状態である。しかしもう少し

詳しく、各地のカボチャの方言を見ると総数111もある。^{注1)} その中に四国の一部にチョウセン、岡山、鹿児島でチョウセンサツマなどという別名がある。

「南瓜」という漢字表記が示すように外来物の名称に、地名+種類名 の命名法がよく使われる。南方の瓜も理解できるが、カボチャは最初カボチャ瓜と呼ばれ、後に瓜が省略されてカボチャとなった^{注2)} というから、チョウセンは朝鮮瓜という別名もあったと考えられる。カボチャが朝鮮半島の名称に由来する可能性はあるかもしれないと、この考察を進める。

1. 既存説 カボチャ ボウブラ ナンキン についての疑問

a. カボチャ

天文2年の1541年、ポルトガル船が大分に漂着し、寄港地のカンボジャから種をもたらしたといふので、カンボジャがなまってカボチャになったと説明される。貿易のために長崎に寄港したポルトガル船という場合もある。きちんと年代まで入って実証的だし、つじつまもあっている。しかし難破であれ貿易であれ、ポルトガル人は自分たちを有利な立場におくためにカボチャの種を持ち出したはずなのに、寄港地のカンボジャの名をことさら、なぜ持ち出したのだろうか。彼らは互いの利益を目的に、武力ではなく、言葉で交渉し解決する商人ではなかったのか。

カボチャをはじめ、トウガラシ、ジャガイモ、トウモロコシなどがコロンブス以後世界に広まったというのだが、それなら東回りで広まったはずで、カンボジャよりもポルトガルのほうがカボチャの栽培では先輩格と見なければならぬ。ポルトガル語でカボチャをuma abobora ウマ アボボラというらしい。アボボラは瓜類をいうのだから、通訳者は当然「ウマ瓜」と通訳すべきだろう。ウマ瓜とはできすぎの名称ではないか。

もう一つ、カボチャ原産国の南米をコロンブス以後に侵略、征服したのはスペインで、カボチャをポルトガルにもたらしたのはスペインということになるが、スペイン語で現在カボチャはカラバサーとかカブテーだそう。音の共通性を言うならばこちらのほうがそっくりだ。

音韻面でも疑問がある。カンボジャの「ン」がなぜ落ちたのか。「ン」音は、神田、新宿など地名や姓名に限らず、日本語に珍しくもない子音なのに、なぜ聞き落としているのだろうか。カボチャ系の名称は20余個を数えるが「ン」のつくものは一つもない。

別名；アバチャ、アボチャ、オカブ、オカボ、カーボー、カッチャ、カブス、カブチ、カブチャ、カボ、カボエチャ、カボチ、カモウツ

1 「日本植物方言集」日本植物友の会 八坂書房 p.58 別名は全てこのものを引用する

2 「語源辞典」吉田金彦 編著 東京堂出版 p.65

b. ボブラ

aboboraはポルトガル語で瓜類をさすというから、カボチャの説明をするのにこの単語は必要だったろう。しかしuma aboboraはカボチャに相当するウマが重要であって、ウリ類に相当するアボボラのほうが重要ではない。ウマ瓜と翻訳できるはずなのに、覚えやすいウマが落ちてアボボラが残ったのが不思議だ。

何よりも納得できないのはaboboraの「a」母音を落としていることだ^{注3)}。「ア」は母音のなかでも強いから明確で聞き取りやすい。カボチャの別名中に「アバチャ」「アボチャ」があるが、これはkabochaの頭音である子音「k」を落とした結果で、それでも母音は捨っている。母音は聞き取りやすいことがこれでも理解できる。

ボブラ系の名称は40個余りで別名の半数ちかいが、母音+ボブラという形もまた、一つもない。

c. ナンキン

ナンキンは中国の都市名、南京と説明される。ポルトガル船の寄港地というわけだが、寄港地の名前を尊重し自国のウマアボボラを強調しなかったかは、カボチャの場合と同じく大きな疑問だ。日本カボチャに関しては中国と日本のものはとてもよく似ていて、相互に交流があったということは確かだ^{注4)}という。したがってこれはほとんど同時期に伝来されたい。漠然と外来物というイメージとしては南京よりは唐のほうがわかりやすそうに思えるのだがどうだろうか。ナンキンに関係がありそうな別名をあげる。

別名；キンカン、キンクワ、キント、ナリキン、ナンカン、ナンキ、ナンキン、ナンキンウリ、
ナンクワン、ナンバイコ、ナンバン

これらの別名を見ると、ナンキンが果たして中国の都市、南京を指すのかといっそう疑わしくなってくる。南京が江戸時代にそれほど親しい地名だったのだろうか。すでに中国は清朝の時代であるが、長崎の出島には相変わらず唐船が貿易していたのだから、中国は庶民にとってはまだ唐だったと思われる。唐系の名称は15個ほどある。

唐系別名；トーウリ、トーガン、トンガン、トンキン、トナス、トーナス、トフラ、トーブラ、
トンボラ

「唐瓜」を音+訓で読むとトーウリ、音+音で読むとトークワ、トーク、トークェなどと読める

3 「日本語の起源」大野晋 岩波新書289 p.85~86に、「英語で笑うことをラフという。日本語では昔、ワラフといった。だからこれは共通な単語である、というのなども、誤りである。勝手にワラフのワを取り去って比較してはならない。……中略……単語の比較で大切なことは、同じ形をしているものを発見することではない。音韻の対応を発見することである。」とある。

4 「日本の食文化」第四巻 魚・野菜・肉 雄山閣
野菜・果実の中国および日本における渡来と受容の歴史について 渡辺 正 p.144

が、実際はトーガン、トンカン、トンキンなど読まれたことが伺われる。ン音で終わるものが多い。クワ、クエなどの合成母音で終るのが落ち着かず、「ン」に変化したのではないかと思われる。

「南瓜」は中国名で、朝鮮にもあるが知識階級の人たちが使った漢字表記だろうと思われる。日本では現在はカボチャと訓ずるが、その昔はボウブラと訓じていた^{注5)}。訓音を知らないとまずは音で読むはずで、唐瓜を参考に南瓜を音+音で読んでみるとナンカン、ナンキ、ナンキン、ナンクワン、ナリキンになるのではないだろうか。瓜音はすべてカ行音で読まれ、トー系と似た構成といえる。

南京とナンキンは偶然に音が一致した可能性が強い。偶然の音の一致は南京だけでなく、別名トウガンは冬瓜、キンカンは金柑と漢字表記できる。

II. 韓国語ホバツhobakkから、日本語のボウブラ、カボチャへの音韻変化

韓国語のホバツは漢字で「胡朴」と表記される。胡は日本語でも胡麻・胡椒でおなじみの、中国西方の外国を示す。朴は夕顔・フクベ・瓢箪などウリ類の固有語バク音を漢字に写したものだから、音+訓 読みの単語だ。

a. ホバツ→ボブラ

ボブラ系の別名は111個の中40個余りで、西日本に多い。ポルトガル船の難破や長崎の出島の貿易に結び付けられる由縁だろう。しかしこれらの地はまた古代から朝鮮半島と深く結びついた地でもある。

別名；ポー、ポークワ、ポーブーラ、ポーフラ、ポーブラ、ポーブリ、ポーボロ、ボグラ、ボツバ、ボフラ、ボボラ、ボルバ、ボンタン、ボンボラ

ホバツの頭音ホが日本語では「ボ」に濁音化し、バは日本で母音の違う「ブ」に変化している。促音のツがラ行音に変化している。金沢庄三郎博士はh/k相通、k/r相通が日鮮両語に共通する音韻上の原則といわれている。濁音にし、ホバツの促音ッ[k]に、k/r相通を適用するとbo-barボバルとなる。r閉音節は日本語では母音を加わえて安定した発音しやすい音に変化する。整理すると、

ho-bak濁音化→bo-bak (k/r相通) →bo-bar (rに母音添加) →bo-ba-ru

ホバツ ボバツ ボバル ボバル

ボバルがさらに①濁音化や清音化、②長音化、③母音変化の要素が加わってボブラ系の別名ができている。

5 「古事類苑50」p.628 吉川弘文館

b. ホバツ→カボチャ

「胡」を韓国ではho ホと読み、日本ではコと読む。同じハ行音でも韓国語のh子音は日本語のハ行音と違って息の量が多い。韓国語のh子音は日本ではカ行音になることが多い。例を挙げると、韓ハン・かん、漢ハン・かん、湖ホ・こ、戸ホ・こ、画ファ・が、火ファ・か 等、韓国ではh子音、日本ではカ行音の漢字は上げればきりが無い。金沢庄三郎博士のh/k相通は単に韓国語と日本語の関係ではなくて、韓国語内でも日本語内でも相通という意味だ。すると朝鮮半島のホバツからカボチャに変化したというよりは、

ホバツ（朝鮮）→ポブラ（日本）→カボチャ（日本）

の変化も考えられる。実際ポブラの名称のほうが先行し、「江戸では享保年間（一七一六～三六）までは南瓜（一名カボチャ）を売っていない」^{注6）}とあるから、ポブラ名から200年ほど過ぎてから現れたのがカボチャという別名ということになる。

ためにハ行音とカ行音をハ・カ・ハ・カと繰り返してみると、カ音は舌根が上がって鼻から息が漏れるのをふさいでいるが、ハ音はカ音ほどに力が入っていないことがわかる。ハとカはこのように微妙な力の差のみだから、しばしば入れ替わり相通といわれる。ホバツ→ポブラにしろ、ポブラ→カボチャにしろ、語源をホバツとすれば音韻変化は合理的に説明できる。

二音節目の「朴 bak バツ」が「ボチャ」になっている。バとボは母音が違うだけだから問題は促音ツがチャになったことにある。促音はk/r相通でカボラとなる。整理すると、

ho-bak (h/k 相通) →ko-bak (o と a の母音交代、k/r 相通) →ka-borカボル

金沢博士はrが又、y/j/n/tと相通であるといわれる。するとka-borはka-bojとなる。子音が最後に来ると日本語は母音加わる。整理すると、

ka-boj (音節末に a 添加) →ka-bo-ja (清音化) →ka-bo-cha

カボジャ カボチャ

以上の説明よりも、促音ツはタ行音であり、同じタ行音のチャに変化したというほうが、理解しやすいかもしれない。kとtは違う子音だが、日本語の促音ではk子音が表現できない。タ行音で説明しやすいのは日本語内でポブラ→カボチャの変化がおきたという傍証になるかもしれない。

ポーブラもカボチャも韓国語ホバツから変化してもよいことを説明した。日本にもハ行音はあるが、韓国のh子音と日本のハ行音は微妙に異なり、その微妙さがある人はホを濁音にし、ある人はカ行音に聞いたことになる。韓国音をカタカナやアルファベットで表記してもそれはあくまでも近い音としてあげていて、そのくらは誰もが頭では理解しているのだが、それでも語源を考えるとときにはこれが音の変化への理解を邪魔したりする。

6 「たべものの語源辞典」清水桂一 東京堂 1980年 p.37

c. その他

長崎の南松浦にボツタ、ボツダ、ボツハ、ボツパ、ボツペの特徴のある別名が記録されている。ホバツの促音ツが拾われているらしいのは、111の別名のうちこの4例のみだ。朝鮮半島とは言葉の面でも関係が深いかもしれない。ホバツは息の子音hから始まる。h子音はすぐ前で聞けばわかるだろうが少し離れると聞き漏らし易い。語中にあれば時間だけは感じるのだが頭音では時間も感じにくい。そのため落とし易い。又はホ、バがどちらもハ行音であるところから縮約されて一音のみのボとなったと考えられる。促音を拾ったので、ラ行音への転換はない。しかし促音で終わる単語は忌避されるので、タ行音のタ、ダが添加されている。ハ、バ、ベ音の添加はボ音と同じハ行音である。子音調和というべきか。整理すると、

ホバツ (ホ、バ縮約) → ボツ (安定、調和した音の添加) → ボツタ、ボツハ、ボツペ等

又、キンカン、キンクワ、キントがある。ナンキンのキンと同じ音を持つが、キンクワには「金瓜」の漢字を当てたい。日本も韓国もカボチャは冬至の行事食だが、韓国では粥にして食べる。このホバツは抱えきれないほど大きくて黄色い。金の漢字を当ててもよいと思われる。日本でも九州では糸瓜のような形をした黄色いカボチャや、円く黄色いカボチャがあって、これらはネットで写真を見ることができる。キンカンが金柑のはずはなく、金瓜キンクワの音便、キントは金唐かもしれない。

III. 終わりに

カボチャとボブラは音感がかなり違う。だからカンボジアとアボブラという、性格をことにする説が出たのだろう。しかし韓国語のホバツを中心になると、ボブラもカボチャもつながってくる。

コロンブスの「新大陸」発見は1492年、ポルトガル船は1541年。豊臣秀吉の朝鮮出兵は1592年の5年間、1597年の2年間である。このとき大量の兵士が朝鮮半島を縦断し、大量の男女が捕虜として朝鮮から日本に連れてこられた。日本人がポルトガル人と接触する機会と、朝鮮人と接触する機会には雲泥の差がある。トウガラシもコロンブス由来の作物だが、日本から朝鮮に伝わったとも、朝鮮から日本に伝わったとも言われる。どちらにしても秀吉の朝鮮出兵ごろの話らしい。カボチャが50年で地球を一周したか、百年で一周したかはわからないが、ポルトガル人が来朝してカボチャを伝えたという記録の最古は天文11年(1542)だという。現物と名称の移動が常に行動を共にするとは限らないだろうし、現物の渡来の現場を確認することはこの情報の発達した現代においても難しい。一方、名称のほうはある程度の追跡は可能だから、この小論はあくまでも名称についてのものとする。朝鮮半島の名称を採用したということは、そのころの日本人が朝鮮人を知識のある人と認めて、丁寧な態度で接していたことをうかがわせる。

語源を考えるとときに別名を考察することが欠かすことができない。しかし江戸時代に生まれたカンボジャ説やアボボラ説は別名の考察がかなり難しかっただろう。封建体制の統治下で、方言は情報統制のための手段でもあったという。限られた人のみが別名を研究する機会があったかもしれないが、そういった場合あまり批判される機会もないだろう。カンボジャやアボボラがあまりに音韻が似ているために、現代でもそのまま受け入れられているが、私は別名の検討から批判を加えてみた。

（パク ボンミ・本学非常勤講師）

参考文献

「世界有用植物事典」植物編 平凡社

「日韓古地名の研究」金沢庄三郎 草風館 昭和60年

「花と樹の大事典」植物文化研究会編 木村陽二郎監修 柏書房